

三島由紀夫「憂国」にみる解放のアダプテーション ～小説・映画・舞台の麗子像の変容を通じて～

文化創造専攻 国文学専修

20001AJM 高橋 美帆

修士論文要旨

本論文では、三島由紀夫の小説「憂国」・映画『憂国』・舞台『死なない憂国』についてアダプテーション批評の視点を用いて、麗子像の変容を考察した。主体化する女性表象の変遷を追うとともに、それぞれのアダプテーションに通底する麗子像のポテンシャルを見出した。また、その麗子が主体形成をする過程を各作品のアダプテーション分析を通じて明らかにし、ひいては今現在の女性の社会参画の課題と照らし合わせることで、女性が主体形成し、社会活躍する手掛かりも、合わせて考察した。以上のような分析をふまえ、時代を超えて麗子像がアダプテーション作品によって繰り返し表象されていく意義を見出した。

一章では、小説「憂国」の麗子の表象について焦点をあて分析し、麗子が主体性を身に着ける過程や麗子が主体化する構造について検討した。小説「憂国」で描かれる麗子は、一切の恐れがなく恍惚と死に飛び込んでいく。その様は、冒頭の新聞記事風の文章で語られる規範的な妻像や人々が眼差す美しい麗子像から逸脱していく。そういった、自身が主体化するために従属する対象を求めるが、その要請からも逸脱してしまう点において麗子の過剰さや特質が指摘できる。

二章では、三島の自主製作作品の映画『憂国』について、三島自身の思惑を考察しつつ、映画「憂国」の映像上で表象されている麗子像を詳細に分析した。三島は日本の古き良き妻像を前景化させるために、麗子の主体性を示唆していた鍵のシーンを削除したと考えられる。また、原作に描かれていた中尉の死に向かう迷いや弱々しさを示す表情が軍帽で覆い隠されてしまうことで、主体としての中尉の存在感が希薄化し、結果的に映像上において麗子の主体性がより強調されてしまったと推察する。

三章では、三島由紀夫没後五〇周年企画『MISHIMA2020』の一つである舞台『死なない憂国』について考察した。本作は、時代背景を現在に置きかえ、結末も大きく変更されている。二・二六事件に巻き込まれた夫婦の在り方を今現在の夫婦のありように置きなおし「憂国」を再考した時、小説「憂国」で不鮮明な夫婦を死に至らしめた根本的な要因が浮かび上がってきた。秘められた麗子の精神性を受け継ぎ、自己を主張する姿へと変容する麗子の表象にも着目した。舞台『死なない憂国』では、その瞬間の陶醉や一体感を求めることで、死ではなく生を

選ぶことができた。舞台の麗子は自己主張も感情表現も激しく、良人が麗子に振り回される場面も多い。ただ、夫婦のお互いの思いを言葉にして怖れず相手に伝えることができる関係性があったからこそ、「憂国」は生の物語へと生まれ変わることができたのである。